

## 第4のネック

第4のネックは情報処理体制の不備である。コンピュータの技術革新はすばらしい、ひと昔前当時の金で50万円以上もした電動計算機に比べ、機能はそれをはるかに上回る電卓が1/100の値段で文字どおりわれわれの掌にある。さらに、大型電子計算機の処理能力を手もとの端末機器によって利用できる時代を迎えている。

また、ソフトについてみるならば、数理計画、統計解析、数値計算、シミュレーション言語などの各種アプリケーションないしライブラリーがメーカーから提供されるとともに、社内においても必要に応じて開発整備されてきた。

データについても、社内で発生するものは、業務の機械化を通じて収集蓄積され、これらを簡単な指示によって検索・加工・作表・作図する汎用システムも電力各社でそれぞれ開発使用され日常業務に定着している。

しかし、それにもかかわらず問題を解決しようとする立場からみると、これらのハード、ソフト、データ、モデルを十分に使いこなしていない、いや使いこなせないのが現実の姿である。それはどこに原因があるのだろうか。

ひと言でいえば、問題解決に必要な用具としてのハード、ソフト、データ、モデルがバラバラに存在するだけであって、これらが目標（この場合は問題解決）を達成

するため有機的に関連づけられて一つのシステムとしてまとまっていないことに最大の原因があると思われる。

## 真の問題解決

以上の考察から、現在ORを活用するうえでの主要な問題は、その理論的局面の不備でもなければ、コンピュータのハード、ソフト、データでもない。これら個々の素材は一応使える状況にある。問題は、問題解決をめざして、これらを有機的に関連づけた思考実験のマン・マシン・システムを構築することにある。

そのためには、問題をもった人と、ORスタッフ、情報処理部門の関係をさらに緊密にして、まず、実現可能なレベルでの潜在ニーズを顕在化し、ついでそのニーズを満たすハード、ソフト、モデル、データを思考実験の取り組み方に関連づけて、問題解決をめざしたシステムづくりを行なうことであろう。それは大きなものよりまず小さな手頃のものから手がけて、逐次システムづくりの経験をつむことが肝要で、さらにいえば、平常から問題をもつ人、ORスタッフ、情報処理担当のコミュニケーションをよくして、潜在ニーズの顕在化が自然に起こるようであればならない。この接近法として、実務のテーマによって、コンピュータを用いた思考実験を体験させる教育はきわめて有効な手段ではなからうか。

(ごんどう・はじめ 中国電力第1企画室総合機械化センター)



## 政策科学

8月例会 8月27日(日)15:00~28(日)12:00

箱根・宮の下公務員保養所(合宿) 13名。

(1) 研究発表「5つの歴史サイクル論から見た1つの情勢予測」(防衛研修所・福島康人氏): ①800年の周期で繰返す文明盛衰サイクル論, ②50~60年周期説をとるコンドラチェフの景気波動論, ③150年ごとに上昇と低滞を見せる日本経済の成長パターン説, ④高温期から30年後に事件が多いという気象と社会変動因果論, ⑤前世紀以来、その時代を支配する中心論理が経済→政治→軍事

で推移したとする支配論理循環説などから、当分は変動の多い時代が続き、戦争の可能性もあと予測。

(2) 研究発表「ソフトウェア業界の素顔・その1」(ジャスティック・富沢健一氏): 下記参照

9月例会 9月9日(土)14:00~17:00, 三菱総研会議室, 出席12名。

(1) 研究発表「ソフトウェア業界の素顔・その2」(ジャスティック・富沢健一氏): ①入社後は面白いが、やがて若い人にならなくなり使い捨てにされる, ②柔軟な思考が必要なのに内向的で頑固で狭小な性格になりやすい, ③ソフトが評価されないためハードにつけて売らざるをえない, ④システム設計のミスは納入後の運用段階でしか判らず大損するから設計が重要, ⑤コンピュータには抽象論より実務論が必要, ⑥ソフトの成果より開発過程こそ貴重, ⑦ユーザーとソフト側の面白い関係などを紹介。